
「でもやるんだよ」 in グラインドハウス

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「でもやるんだよ」 in グラインドハウス

【Nコード】

N6741L

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

首を切り落とすことだけが取り得の処刑人。

家族との葛藤がありつつ、悩む彼がとった行動とは？

(前書き)

グラインドハウスとは

B級映画を複数立てて放映する映画館のことらしいですよ。
ここでは適当でB級な小説を自分が楽しめます。

昔々、首を切り落とす処刑人がいました。

大層首切りが上手く、王様のお気に入りでした。

そして今日も王都の中央広場では罪人の公開処刑が行われました。王様は自分に逆らう犯罪人が目の前で首を落とされる姿を楽しみなのです。

民衆を無理やり集めては皆の反応を楽しんでいました。

処刑人の名前はプレシヤスです。

プレシヤスは公衆の面前で行う処刑に誇りを持っていました。

大きな斧を軽々と振り上げ

あっという間の勢いある斬首。鮮やかな切り口。一瞬だけ波打つ身体。少し間があって首から飛び出す血液。

王様は感極まって立ち上がります。

「すばらしい！ 人間の首があんなにも飛んだぞ！ みごとだプレシヤス」

王様は刑が終わると民衆を見渡し、宣言します。

「逆らうのならちゃんと生きたまま捕まってくれたまえ。素敵な催し物が見れなくなるからな」

ずっと静まり返っている民衆をみて満足そうにすると、王様は城へと戻りました。

しかし、この王国は歴史的に見て全盛期であり、民衆はどうすることもできませんでした。

「プレシヤス、ご苦労であった」

プレシヤスは黙って礼をすると立ち去ります。

彼を避けるように民衆は二つに分かれ道を譲ります。

そして歩く彼に罵声を浴びせました。

「この極悪人！」

「王の犬！」

「化け物っ！」

「人殺しっ！」

しかし、プレシヤスは何も言わずに立ち去ります。

ゆっくりと歩き、たどり着いた先は自分の家でした。

家の中に入ると家族が彼の帰りを待っていました。

「あなた、お帰りなさい」

「……お帰り」

家では妻と子供が待っていました。

妻はどこか疲れた表情です。

子供は涙目で目を赤く腫らせています。

プレシヤスが子供に涙目のわけを聞きました。

「お父さん、また今日も人の首を刎ねてきたんだよね」

プレシヤスは黙って頷きます。

同時に子供は泣き声をあげました。

「何でそんな仕事するの！？ 僕、またいじめられるよお！」

子供はプレシヤスの身体を叩きながら、涙をぼろぼろ零しました。

プレシヤスの妻は子供の頭にそっと手をおきます。

「お父さんだって好きでやってるんじゃないのよ。コレが仕事なの」
「だって！ だって！」

妻はプレシヤスへ困ったような表情を向けます。

よく見ると妻の目も赤くなっていました。

「おお、プレシヤス。帰ってきたか！」

大きな声を上げて家の中に入ってきたのは、プレシヤスの親友でした。

プレシヤスの妻とも幼馴染でよく家にやってきます。

「おいおい、子供をまた泣かせちゃったのか？」

プレシヤスがうなずくと、親友は肩をすくめました。

「まあ、仕事だしな。でも、家族を泣かすのはあまりよくないぜ」

「あなた、もう今日は仕事がないんでしょ？ さあ、ぐっすりやすんでくださいな」

妻がプレシヤスを促します。

プレシヤスは頷くと家の奥へと歩いていきました。

次の日も処刑が行なわれました。

プレシヤスは今日も罪人の首を刎ねます。

罪人は王国の不平等を国民に訴えた政治犯です。

「国民は皆平等であるべきだ！ 王だけ贅沢は許されん！」

罪人が懸命に刑の執行を見物している人々に訴えます。

国民主権の考えが少しずつ芽生えてきた時代でした。

プレシヤスが振り下ろした斧が真っ直ぐに落とされると、前に首が吹き飛び、首元からは血液が吹き飛びます。

「おおっ、今日も見事な斬首！ 見事であったプレシヤス。もはやお前の斧さばきは芸術だな」

王様は手を叩いてプレシヤスを賞賛します。

喜んでいる王様は後の歴史家に名君と呼ばれる素晴らしい人でした。

この時代、王国の経済は栄え、農業は進歩し、人々がそれなりに安心して暮らせる福祉や施設を充実させました。

素晴らしい政治の反動でしょうか？

王様は罪人の処刑を見てはストレスを発散していました。

刑の執行が行なわれた後、プレシヤスは王様へ一礼をすると処刑

場を立ち去ります。

「この極悪人！」

「王の犬！」

「化け物っ！」

「人殺しっ！」

しかし、今日もプレシヤスは何も言わずに立ち去ります。

家に帰ると妻がプレシヤスを待っていました。

帰ったばかりのプレシヤスへ妻は駆け寄ります。

「もう、こんなこと止めて！ あの子が……石をぶつけられて寝込んでしまったのよ……」

涙目で怒気を含んだ妻の言葉にプレシヤスはショックを受けました。

急いで子供部屋へ向かうと、ベッドの上でうなされている子供がいました。

「うーん。お父さんは悪くない……お父さん……なんで？」

プレシヤスは子供の寝言を聞いて涙を零しました。

「プレシヤス、オレが頭から血を流してるこの子を見つけたんだぜ」
背後にいた親友がプレシヤスに話しかけます。

「……もう、あんな仕事止めるんだ。仕事ならオレが紹介してやるから」

プレシヤスは黙って頷きました。

次の日、プレシヤスはお城へ仕事を辞めることを伝えに行きました。

多少、引きとめられましたが、なんとか辞めることができました。

「いままで精神を保ちながら良くやってくれた。ありがとう」

上司には怒られるどころか、逆に謝辞をもらいました。

プレシヤスはこうして首切りの仕事から離れました。

早速、プレシヤスは親友の紹介してくれた仕事を始めました。

建築現場で働くことになった、プレシヤス。

しかし、順調とは行きませんでした。

仕事場での立ち回り方が分からずに叱られ、力を入れすぎて道具を壊し、作業も遅く、皆に迷惑をかけました。

最初は「まだ初めてだから」と大目に見てもらっていましたが、何日も何日も同じ失敗を繰り返しました。

その度に叱られ、プレシヤスは落ち込みました。

疲れた身体を引きずり、プレシヤスは家に帰ります。

家に帰ると、妻と子供は笑顔で迎えてくれました。

二人の笑顔を見るとプレシヤスは心が休まります。

さらに親友と飲むお酒も美味しいものでした。

仕事は辛くともやっていけそうだとプレシヤスは思いました。

その頃からでしょうか。

処刑日になると、叫び声とうめき声が街中に響きました。

プレシヤスの代わりに処刑を行なった兵士の手際が悪く、何度も何度も首を切りつけるのです。

吹き出す血液を浴びて血まみれの兵士が必死に斧を振り下ろします。

何度も狙いは外れ、後頭部や背中へ斧が刺さりました。

陰惨な光景に無理やり集められた国民は皆、顔を背けました。

王さえもため息混じりに処刑を眺めています。

さらに処刑を行なった兵士は皆、精神に異常をきたし、城を離れ

るのでした。

プレシヤスは今日も仕事に出ます。

現場監督に怒られ、先輩に怒られ、最近では後輩にも馬鹿にされます。

まったくの不器用で迷惑ばかりかけていました。

「プレシヤスさん、邪魔ですからどいてください」

「ホントにお前はなんでここにいろの？ もう帰れよ」

「アイツの紹介じゃなかったら、お前なんかとつくに首なんだよ！」精神的にも体力的にもきつい仕事、なのに失敗をすると賃金を減らされます。

プレシヤスはそれでも家族のためだと頑張りました。

でも、帰り道にふと立ち止まると、ため息が漏れました。

家に帰るとふと昔のことを思い出し、王様に褒められた話をします。

でも、妻や子供は露骨に嫌な顔をして話を遮りました。

親友もため息交じりでプレシヤスを諭します。

「お前は今の仕事を頑張ればいいんだよ」

そんな時です。

今日も仕事場で罵られて帰ってきた、プレシヤス。

疲れた身体を引きずるように家へ帰ります。

家に入ると元上官が待っていました。

プレシヤスは上官の姿を見て一瞬だけ心が躍ってしまいました。

しかし、すぐに打ち消して心を静めました。

でも……もしかして……

その思いはプレシヤスの思い通りになりました。

上官はプレシヤスの処刑人復帰を願いに來たのです。

プレシヤスが辞めてからすでに五人の処刑人が精神に異常をきたし、辞めていました。

さらに王様のストレスも溜まる一方と言う話です。

今日一日考えて返事を聞かせて欲しいと残して上官は去っていきます。

妻と子供は猛反対しました。

「もう、あんな真似やめてよっ！」

「あなた。私達の気持も考えて頂戴」
プレシヤスは悩みました。

この事を親友に相談してみました。

すると親友は神妙な顔つきでプレシヤスに告げます。

「これ以上、あの人を不幸にするようだったら、オレがあの人をもらうぞ」

あの人とはもちろんプレシヤスの妻でした。

親友はプレシヤスの妻とも幼馴染で昔から好意を持っていたのでした。

親友の家を出て、プレシヤスは夜空を眺めます。

子供の頃は好きなことがたくさんありました。

得意なことも苦手なことも沢山ありました。

どんな事も楽しかったはずです。

でも、歳を取るごとにチャンスや可能性は消えて、好きだったものも興味を無くしていきます。

プレシヤスはやり直すには、かなり歳を取っています。

無限の可能性はもうありません。

好きだと言える事も数えるほどしかありません。
その好きなものの一つが「首切り」でした。

処刑を行なう時のあの高揚感。

自分しかできないと自負できる手さばき。

道具にもこだわり、手入れも自分で行ないます。

計算しつくされた動作と切れ味鋭い道具のお陰で、一瞬で絶命してしまいます。

罪人を苦しめないことも含め、動作の全てが芸術だと自分でも思っています。

さらに王は自分の斬首を芸術と認めてくれる唯一の理解者です。
王に褒められる時の誇らしさは何物のにも変えがたいものあります。

自分は結婚もし、子供もいます。

ワガママは言えません。

処刑人を選べば、親友に妻と子供を取られてしまうでしょう。

しかし、今の仕事を思い出すと……

皆の視線がプレシヤスへと突き刺さります。

中にはため息交じりに通り過ぎる仕事仲間もいます。

突き刺さる日差し、怒鳴られる自分。

そこには高揚感も誇りもありませんでした。

ああ、自分には後、何が残せるのだろうか。

星空は輝きを増して瞬いています。

あの輝きにはもう届かないのだろうか……

そして……

「今日も斧が振り上げられます。

一瞬の静寂の後、罪人の首めがけて振り下ろされます。

すると、首は前に吹き飛び、首元からは血液が噴出します。

処刑人は一切の返り血を浴びることなく誇らしげに立っていました。

王様は彼の仕事に拍手を送ります。

処刑人は拍手の音を耳で存分に聞きました。

「ご苦勞であった」

上官の言葉に処刑人は黙って礼をすると立ち去ります。

彼を避けるように民衆は二つに分かれ道を譲ります。

そして歩く彼に罵声を浴びせました。

「また戻ってきたのか、この極悪人！」

「やっぱり、王の犬だったんだな！」

「化け物っ！」

「人殺しっ！」

しかし、今日も処刑人は何も言わずに立ち去ります。

ゆっくりと歩き、たどり着いた先は自分の家でした。

ドアを開けて入る室内。

そこにはもう誰もいません。

処刑人は静かな室内を眺めます。

生活感の無くなった部屋はまるで他人の家のようにでした。

やがて自嘲気味に閉じた口を一瞬歪ませて、呟きます。

「……でもやるんだよ」

男は黙って疲労を癒すために奥の寝室へと向かいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6741/>

「でもやるんだよ」 in グラインドハウス

2010年10月8日13時58分発行